編　集　後　記

令和２年という年は、COVID-19 に始まり COVID-19 に終わった年でした。令和２年が終わり、令和３年を迎えても、COVID-19 のほうは未だ終わりが見えていません。COVID-19 は世界中の多くの人々の生命を脅かし、また、その生活に多大な影響を与えました。われわれ医療者としても理想的な医療の提供に大きな困難を伴うようになりました。コロナ禍の中での活動において、人々はさまざまな工夫、協力、団結を求められています。COVID-19 診療拠点病院である当院を見ても、COVID-19 診療の最前線で戦っている医師、看護師はもちろんのこと、それを支える多くの職員の方々の熱意と団結力には大きな感銘を受けます。同様のことが、COVID-19 診療拠点病院ではない他の全ての市民病院機構の病院でも今起きているのだと思います。

コロナ禍により、人の移動や集会は制限され、学会も中止や延期となりました。そうした中、令和２年には第 84 回日本循環器学会学術集会が開催されました。当初の開催予定は３月でしたが、COVID-19 第一波により８月に延期、さらに完全 WEB 開催へ開催形式も変更されました。この学会はコロナ禍のため完全 WEB 形式で開催された国内の大規模学会として、最初のものだったと思います。参加者が１万人をはるかに上回る学会が本当に WEB 開催可能なのか確信が持てなかったのですが、実際に開催されてみると、学会長の木村剛京都大学循環器内科教授をはじめ事務局や同門の方々の団結と協力により、後に続く学会の道しるべとなるような見事な学会でした。これは暗い出来事が多かった令和２年の中で印象に残る良いできごとでした。

さて、さまざまな活動が難しくなり、学術活動へのモチベーションも高まりにくい現状ですが、今回の神戸市立病院紀要にもたいへん興味深い総説や症例報告が掲載されています。西市民病院の有井滋樹院長からは肝細胞癌への外科治療に関する最新の話題についてご寄稿いただきました。手術ナビゲーションや分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などに関する情報など、肝細胞癌の診療以外でも急速に発展している領域の話題が述べられており、肝疾患がご専門ではない方々にもきっと興味のある教育的な内容です。そのほか、中央市民病院精神・神経科、血液内科、および薬剤部から臍帯血移植後の HHV-6 によるウイルス性脳炎、西市民病院臨床検査技術部、産婦人科、および病理診断科から穿刺吸引細胞診が有用であった耳下腺原発粘表皮癌の症例が報告されており、診断のプロセスなど、いずれも興味深く読めるものとなっています。皆さんもぜひご一読ください。

最後に、ご投稿いただいた皆さん、本誌の編集・発刊までご尽力いただいている法人本部の企画財務課の方々に感謝申し上げるとともに、コロナ禍の中だけに、皆さまのご健康と少しでも早い COVID-19 の終息を祈念して、編集後の所感とさせていただきます。

神戸市立医療センター中央市民病院　循環器内科
古　川　　裕